

徳富蘇峰記念館

目録 (6)

歴代総理大臣の書簡展

伊藤博文から鈴木貫太郎まで

(昭和61年10月～昭和62年9月)

蘇峰は「自伝」の中で「予は自から政治家たるを好まなかつたが、併し政治そのものは頗る好物であつて、須臾も政治を離れる事が出来ず、その為漸次に實際の運動にも主役ではなかつたが、加役として多少の努力をした」と語っている。当館所蔵の蘇峰宛三万二千点の書簡の整理をすゝめていくうちに、蘇峰と政治家との繋がりや深さを改めて実感した。そこで今回の特別展示は、日本の内閣制度の成立した明治18年12月、初代伊藤博文から、明治・大正を経て、昭和20年4月成立した敗戦時の総理鈴木貫太郎まで、42代60年間の総理の書簡の展示を試みた。この間29名の総理を数える。伊藤博文は初代・5代・7代・10代の四回総理をつとめ、桂太郎は11代・13代・15代、近衛文磨は34代・38代・39代と三回総理をつとめている。二回総理の座にあつた者は、山県・松方・大隈・西園寺・山本・若槻の六名である。

当館には29名の総理のうち、25名の総理からの書簡がある。書簡のない総理は黒田清隆・山本権兵衛・加藤友三郎・平沼騏一郎の4名である。

29名の総理の中でも伊藤博文・山県有朋・松方正義・大隈重信・桂太郎・寺内正毅・清浦奎吾・加藤高明・~~林~~近衛文磨との交遊は、人間的に深い繋がりのあるものであり、これらの人物については、蘇峰自身が『事務一家言』(大・2年民友社)『蘇峰自伝』(昭10年中央公論社)『我が交遊録』(昭13年中央公論社)『蘇峰感銘録』(昭19年宝雲舎)『三代人物史』(昭46年読売新聞社)等多くの著書で親しく書いている。

蘇峰が最も深く係りを持った総理は桂太郎である。桂の影武者としての蘇峰の働きは、昨年当財団が編集・出版した『徳富蘇峰記念館所蔵・民友

社関係資料集』(昭・60年三一書房)に収録した資料で示した通りであるが、今回展示のためいろいろ整理を行ない、その途上新たな資料が見つかった。それは明治35年1月30日にロンドンで協約された日英同盟の全文の草稿が、蘇峰の筆で野紙に書かれているもので、この全文は桂が議会で紹介した原稿と共に巻物に収められている。この資料の背景については、日英同盟にこぎつけるまでのさまざまな政治事情や、伊藤博文との関係など、多くの調べが必要であるが、蘇峰が第一次桂内閣の時から桂に深い係りを持つていたことを示す資料としての意義は大きいと思われる。それは第二次・第三次桂内閣と蘇峰との係りは周知の事実であるが、第一次桂内閣との係りはあまり知られていないからである。

伊藤博文との関係も、人間的にも、又蘇峰の政治に対する考え方の変遷を辿るうえからも興味深いものがある。蘇峰は明治20年「国民之友」、23年「国民新聞」を創刊した当時、盛んに伊藤を攻撃した。その結果、雑誌や新聞の発行停止の処分を受けている。それは当時の蘇峰が「藩閥政府には絶対反対、憲政樹立の急務は唯だこれを打破するにあり」と考えていたからである。伊藤は元氣のよい蘇峰に興味を持つていたようで、第三次伊藤内閣を組織した明治31年1月、官邸に蘇峰を招き面会したそうである。その時の蘇峰は反藩閥政府一本やりの蘇峰ではなかつた。日清戦争の経験が蘇峰の考えを変えていた。

明治28年日清戦争後、日本はロシア・フランス・ドイツの三国の干渉によって、一度は日本の領土となつた遼東半島の還付を要求された。この三国干渉から受けた国民の衝撃は大きく、蘇峰にとつても、人生観を変えるものであつたと次のように自伝に書いている。「この遼東半島還付が、予のほとんど一生における運命を支配したといつても差し支えあるまい。

このことを聞いて以来予は精神的にはほとんど別人となつた。而してこれというのにも畢竟すれば力がたらぬゆえである。力がたらなければ、いかなる正義公道も、半文の価値もないと確信するにいたつた」と。蘇峰のこの文章は、中学の社会科学の教科書に引用されている。このことは当時の日本人の気持を代弁した最適の文章であつたからであろう。蘇峰は小さい頃から学問は治国平天下のため、道理は最大有力なもので、道理の向う所天下に敵なしと教えられて育つた。しかし三国干渉によって外国と対等につき

あうには力が必要であることを痛感し、これが蘇峰の国家主義への転向のきっかけとなった。これからの蘇峰は帝國主義を唱道し、軍事拡張、租税増徴を強調し、政府の動向に積極的にかゝるようになる。

蘇峰は29年から30年にかけての外遊視察によつて、軍事力の必要をより強く実感して帰国した。そして松方内閣の要請によりすぐに参事官となった。明治29年9月に成立した松方内閣は、その内部で松方首相派と大隈外相派（進歩党）が地租増徴、軍事拡張問題で対立し、ついに進歩党が松方内閣との提携を断絶することになり、30年10月には大隈をはじめ、進歩党の議員が辞任した。しかし、蘇峰は松方のもとに止まつた。

平民主義を唱えていた蘇峰は、進歩党と行動を共にしなかつたことによつて激しい非難を受け、「変節漢」「藩閥への降伏者」「政治的売徳漢」などと呼ばれるに至つた。それでも蘇峰は12月に松方内閣が総辞職するまで止まつていた。この時、父親一敬と勝海舟だけが蘇峰の行動を理解してくれたという。天下の悪評を一身にあびながらも、蘇峰は日本に軍事拡張が必要であり、それには租税増徴が必要であると信じて、進歩党のように租税増徴に反対できなかったのである。このような行動の中で伊藤に対する理解も変わつてきていたことは明らかである。

蘇峰は「蘇峰漫談」（「言論報国」昭19・2 毎日新聞）の中で明治33年の伊藤との係りの様子を次のように書いていた。「府県會議員選挙に際して黨員に与える書というのは、あれは英文で書かれたものである。そうして私があれば日本文に翻訳したものであります。私は大磯の伊藤さんから「急ぎ来い」という電報を貰つたのでどういふ急用かと思つて行つたところが、これを一つ翻訳してくれということである。どうも日本文で書いては意味がはつきりせぬから一番初めに都筑馨君に英文で書かせた。君一つこれを翻訳してくれ」と。当時の伊藤と蘇峰との親しい間柄を示す話である。又、国民新聞記者の古谷久綱は蘇峰の推薦によつて伊藤の秘書になつた。

伊藤と同じように山県・西園寺・松方等とのエピソードを書いていくと紙面がいくらあつてもたりないので、最初に紹介した書物を読んでいただきたい。蘇峰は一人一人の長所短所を適確にとらえ、人間として感激したり、感銘したりしている。そして政治というものを学んでいつた。その結

果「いかに實際政治家なるものが、吾々の理想と遠きかを体験し、いよいよ自ら政治家となることが嫌となつた」と述べている。

蘇峰は「公爵桂太郎伝」（大・6年）『公爵山県有朋伝』（昭・8年）『公爵松方正義伝』（昭・10年）を編述し先輩の偉業をまとめることにも尽力した。

29名の総理の年令を見ると、蘇峰より伊藤は22才、松方は28才、桂は16才、西園寺は14才年上である。24代目の総理加藤高明までは蘇峰よりみな年上である。25代の若槻礼次郎からは、大養毅と斎藤実の外は年下となつた。この年令的な境界線は、大正15年を境としている。

蘇峰が政治に實際的に係りを持ったのは、桂内閣が最後であり大正2年桂の死後『事務一家言』を著し、政界から身を引いた。大正3年『近世日本国民史』を書き始めたが父親の死で中断し、大正7年から本格的に執筆を開始した。

それ以後の蘇峰と政治家との係りは、歴史家、文章報国家、言論人としての係りであつた。蘇峰の明治・大正に於ける元老との繋がり、政治の経験者としての重み、漢籍の教養、人間蘇峰の博識が人々に尊敬され、認められていたことは書簡から明らかである。

東条英機は蘇峰より21才若い、小磯国昭は17才、鈴木貫太郎は4才若い。経験豊かな蘇峰だからこそ戦時中の総理に対しても、言いたいことが言えたのであろう。昭和17年11月1日の東条の「大東亜省官制公布」については、「今般ノ官制改革ハ明治18年末伊藤第一内閣創立当時ノ改革ト共ニ比類稀ナル大改革ニシテ」とほめ、次いで「希クハ余リ調子ニ乗リス 恭謙士ニ下リ、謹孝衆ニ親シムノ素心ライヨイヨ新ニシテ此ノ大改革ヲ完成セラレシコトヲ」と忠告している。

又、18年3月には東条が新聞用紙に制限を加えたことに対して、「東条内閣ノ威信ハ当サニ地ニ墜ツヘシ」と嘆き「老生五六十年來ノ経験ニヨレバ」新聞の力がいかに大きいか、用紙を少くすることは百害あつて一利なく、新聞紙は情報局ノ延長にして、又、其の補充なりと述べている。紙幅を削減することは敵国に我が物資の窮乏を示すことであると警告し、「新聞ヲ以テ兵器ノ一トセハソレニ兵器トシテノ効用ヲ作ラシメサル可ラス」と述べている。又、東条の左右には政談官ありて政治家なしとも書いてい

る。当時の東条にこのようなことが言えたのは蘇峰ぐらいではなかつたらうか。中野正剛は東条の翼賛選挙に反対し、東条内閣の独裁が進めば、君民一体となつて戦う大東亜戦争を裏切るような空気を醸成することにもなろうと蘇峰に書簡を送っている。正剛は18年10月割腹自殺をする。反東条を主張した正剛の葬儀は、東条の弾圧下で行なわれたが、蘇峰はそれに列席した。「十分言いつくせぬ」と述べた心からなる蘇峰の哀悼の詞は、参列者の涙をさそつたという。

蘇峰は小磯内閣の時、19年12月内閣顧問になるよう要請されたが、内閣には最善の力を以つて支援致す覚悟であるが、顧問は82才には不相応であると断つている。この時、蘇峰とも親しい大谷光瑞が顧問になつた。昭和20年4月鈴木内閣が成立した。その時の陸相阿南惟幾に宛て蘇峰は書簡を送り、「軍人ハ其ノ家族ト共ニ飽食暖衣シテ国民ニノミ耐苦耐乏ヲ強制スト云フ者モアリ」と苦言している。これら蘇峰の書簡は「私信手控」として蘇峰の自筆で当館に残されている。

蘇峰は昭和17年12月23日「大日本言論報告会」の会長に就任した。終戦後その為戦犯にとわれることになつた。昭和22年9月自宅拘禁解除の通知を終戦連絡中央事務局政治部長から受け、昭和27年4月内閣総理大臣から追放解除が通告された。これらの書類も展示してある。

戦事中に出された雑誌「言論報告」（大日本言論報国会）「良い子の友」（小学館）「どんな隣組がよいか」（翼賛隣組ニュース社編）三宅彰剛著「軍人宰相論 東条大将の奮闘」（東京情報社）中野正剛著「此一戦 国民は如何に戦うべきか」（東方会発行）等も展示してある。

珍しいものとしては終戦直前直後に投下された宣伝ビラ合戦を示す十八枚のビラを展示する。これらのビラには日本側と米国側があり、日本側には徹底交戦を主張する組と戦争を止めようとする二種類がある。宣伝ビラの種類の多さは、そのビラにふられたナンバーが二千をこえていることでも推察される。米国側は「日本の皆様」「日本軍部指導者諸君」「日本国民諸君」と呼びかけたもので、アメリカ合衆国大統領ハリイ・エス・トルーマンより一書を呈すと、トルーマンの写真入りである。日本側のもは、日本国民は欲望の自由、恐怖からの自由、言論の自由、圧制からの自由を欲し、この自由を得る道は唯一つこの戦争を惹起した軍閥を除去する

ことだといひ、又、一方「戦ヘル、マダイクラデモ戦ヘル、今マデノ戦争ニ国民ハ本当ノカラダシテハイナイ」等というものがある。紙質の悪さが当時の窮地をしのばせるものである。

開戦直後の昭和16年12月11日付の「海軍作戦経過概要図（海軍省）」と、16年12月8日から14日までの「陸軍作戦要領図」（陸軍省印刷）も展示する。

以上、伊藤博文から鈴木貫太郎まで、歴代の総理からの書簡を中心に展示したが、総理と蘇峰の係わりを示す資料も合せて展示した。蘇峰が初代から42代までの総理と、時代によつてその係わり方は異つても、60年間始終係わりを持ち続けていたことは、日本の近代史の流れの中を敢然として歩んだ一人の超人的人物であることを感じさせる。政治家と蘇峰の係わりを一堂に展示することは、蘇峰の生涯の核心に触れる一種の試みともなるう。

なお蘇峰と政治家との交際の様子は、総理経験者だけでは語れないので、『近代日本政治史必携』（遠山茂樹・安達淑子）を参照し、初代から42代までの全閣僚316名についての書簡の有無を調べ表にした。書簡のあるものは186名で全体の60%を占めている。しかしいちがいには書簡の有無だけではその交際の様子は語れない。それは蘇峰自伝の中で親しく交際している人の書簡がないこともあるからである。たとえば『将来之日本』を最初に見せに行つた板垣退助の書簡がないことや、一度は大げんかをしたが十年後には仲良くなつたと言われる星亨の書簡などもない。又、官僚にならなかつた人々、たとえば中江兆民や島田三郎・矢野文雄・植木枝盛など多彩な政治家の書簡があることも付け加えておく。尚、これら書簡の整理には、伊藤隆東大教授を中心とした諸先生・諸研究者の協力を受けた。

昭和六十一年十月一日

財団法人 徳富蘇峰記念 塩崎財団

歴代総理大臣の書簡

(明治18年～昭和20年まで)

注 {
 イ. 蘇峰との年令差
 ロ. 総理大臣就任順
 ハ. 当館所蔵の書簡数
 ニ. " 名刺
 ホ. ○印は『徳富蘇峰関係文書』に収録のもの
 ヘ. ()内の書簡は筆写したもの

氏名	生没年	イ	出身県	ロ	ハ	ニ
伊藤 博文	1841-1909	+22	山口	初代. 5代. 7代. 10代	③	
黒田 清隆	1840-1900	+23	鹿児島	2代	なし	なし
山県 有朋	1838-1922	+25	山口	3代. 9代	⑤⑦	
松方 正義	1835-1924	+28	鹿児島	4代. 6代	⑦⑨	1
大隈 重信	1838-1922	+25	佐賀	8代. 17代	⑬	1
桂 太郎	1847-1913	+16	山口	11代. 13代. 15代	⑳	
西園寺公望	1849-1940	+14	京都	12代. 14代	2+(32)	1
山本権兵衛	1852-1933	+11	鹿児島	16代. 22代	なし	なし
寺内 正毅	1852-1919	+11	山口	18代	㉕	
原 敬	1856-1921	+7	岩手	19代	1	
高橋 是清	1854-1936	+9	東京	20代	1	
加藤友三郎	1861-1923	+2	広島	21代	なし	なし
清浦 奎吾	1850-1942	+13	熊本	23代	⑧②	
加藤 高明	1860-1926	+3	愛知県	24代	10	1
若槻礼次郎	1866-1949	-3	島根	25代. 28代	5	
田中 義一	1864-1929	-1	山口	26代	7	2
浜口 雄幸	1870-1931	-7	高知	27代	1	
犬養 毅	1855-1932	+8	岡山	29代	⑦	1
斎藤 実	1858-1936	+5	岩手	30代	7	2
岡田 啓介	1868-1952	-5	福井	31代	1	
広田 弘毅	1878-1948	-15	福岡	32代	1	
林 銑十郎	1876-1943	-13	石川	33代	10	1
近衛 文磨	1891-1945	-28	東京	34代. 38代. 39代	22	1
平沼騏一郎	1867-1952	-4	岡山	35代	なし	1
阿部 信行	1875-1953	-12	石川県	36代	5	1
米内 光政	1880-1948	-17	岩手	37代	2	
東条 英機	1884-1948	-21	東京	40代	15	1
小磯 国昭	1880-1953	-17	山形	41代	5	1
鈴木貫太郎	1867-1948	-4	大阪	42代	(1)	2

閣僚経験者の書簡
(明治18年～昭和20年まで)

注
イ. 書簡のある官僚のみをリストアップした
ロ. 総理経験者は一表にまとめてあるのではありません
ハ. 通数に○印のあるものは「徳富蘇峰関係文書」に収録してあるもの
ニ. 蘇峰との年令差

氏名	=	出身県	書簡通数	名刺
井上馨	+28	山口	⑩	1
大山巖	+21	鹿児島	②	
西郷従道	+20	鹿児島	1	
土方久元	+30	高知	4	
田中光頭	+20	高知	⑤⑥	
山尾康三	+37	山口	1	
井上毅	+19	熊本	⑦	
後藤象二郎	+25	高知	④	
小牧昌業	+20	鹿児島	⑨	
青木周蔵	+19	山口	⑰⑱	
樺山資紀	+26	鹿児島	⑨	
芳川顕正	+22	徳島	④	
陸奥宗光	+19	和歌山	③	
周布公平	+13	山口	1	
高島鞆之助	+19	鹿児島	⑨	
野村靖	+21	山口	⑤	
伊藤己代治	+6	長崎	③	
末松謙澄	+8	福岡	⑳㉑	
浜尾新常	+14	兵庫	7	
神鞭知常	+15	京都	2	
梅謙次郎	+3	島根	1	
曾彌荒助	+14	山口	1	
金子堅太郎	+10	福岡	④④	
松田正久	+18	佐賀	1	
尾崎行雄	+4	神奈川	34	
大石正己	+8	高知	5	
武富時敏	+8	佐賀	3	
児玉源太郎	+11	山口	②	
波多野敬直	+13	東京	13	
菊池大麗	+8	東京	7	
安広伴一郎	+4	福岡	2	
平田東助	+14	山形	①	
恩田義人	+3	鳥取	3	
小林寿太郎	+8	宮崎	①	
柴田家門	+1	山口	14	
一木喜徳郎	+4	静岡	22	
阪谷芳郎	0	岡山	⑰⑱	
千家尊福	+18	島根	1	
牧野伸顕	+2	鹿児島	⑱	

氏名	=	出身県	書簡通数	名刺
山県伊三郎	+6	山口	1	1
岡部長職	+9	岐阜	2	
小松原英太郎	+11	岡山	⑨	
大浦兼武	+13	鹿児島	④⑧	
後藤新平	+6	岩手	④⑦	
内田康哉	-2	熊本	17	
山本達雄	+7	大分	4	
石本新六	+9	兵庫	2	
上原勇作	+7	宮崎	4	
長谷場純孝	+9	鹿児島	51	
木越安綱	+9	金沢	1	
江木翼	-10	山口	5	
大岡育造	+7	山口	2	
元田肇	+5	大分	5	
山之内一次	-3	鹿児島	1	
石井菊次郎	-3	千葉	2	
岡市之助	+3	山口	1	
大島健一	+5	岐阜	2	
八代六郎	+3	古屋	6	
高田早苗	+3	東京	4	
河野広中	+14	福島	1	
箕浦勝人	+9	大分	3	
水野錬太郎	-5	秋田	8	
岡田良平	-1	静岡	2	
児玉秀雄	-13	山口	9	
有松英義	0	岡山	1	
床次竹二郎	-3	鹿児島	1	
中橋徳五郎	+2	石川	1	
野田卯太郎	+10	福岡	89	
高橋光威	-4	新潟	1	
馬場鉄一	-16	東京	1	
伊集院彦吉	-1	鹿児島	2	
井上準之助	-6	大分	1	
宇垣一成	-5	岡山	8	
江木千之	+10	山口	3	
前田利定	-11	東京	22	
藤村義郎	-7	京都	1	
小橋一太	-27	熊本	2	
小川平吉	-6	長野	7	

氏名	＝	出身県	書簡通数	名刺
岡崎 邦輔	+ 9	和歌山	4	
早速 整爾	- 5	広島	1	
片岡 直温	+ 4	高知	2	
安達 謙蔵	- 1	熊本	27	
井上 匡四郎	-13	熊本	2	
塚本 清治	+ 9	兵庫	2	
望月 圭介	- 4	広島	4	
白川 義則	- 5	愛媛	1	
原 嘉道	- 4	長野	1	
山本 梯二郎	- 7	新潟	6	
鳩山 一郎	-20	東京	15	2
俵 孫一	- 6	島根	1	
安保 清種	+ 7	佐賀	6	3
町田 忠治	0	秋田	1	
櫻内 幸雄	-17	島根	4	1
小泉 又次郎	- 2	神奈川	1	
原 脩次郎	- 8	茨城	1	1
鈴木 富士彌	-19	大分	7	
斉藤 隆夫	- 7	兵庫	1	
芳沢 謙吉	-11	新潟	17	
荒木 貞夫	-14	東京	10	2
大角 岑生	-13	愛知	1	
川村 竹治	- 8	秋田		1
島田 俊雄	-14	島根		1
小山 松吉	- 6	茨城	3	
後藤 文夫	-21	大分	1	1
中島 久万吉	-10	群馬	1	
永井 柳太郎	-18	石川	9	
小原 直也	-14	新潟	3	
内田 信也	-17	茨城	2	
金森 徳次郎	-23	愛知	1	
有田 八郎	-21	新潟	1	
寺内 寿一	-16	山口	1	1
永野 修身	-17	高知	1	
小川 郷太郎	-13	岡山	2	
頼母 木桂吉	- 4	広島	2	
永田 秀次郎	-13	兵庫	9	
次田 大三郎	-20	岡山	1	
佐藤 尚武	-19	大阪		1
河原 田稼吉	-33	東京	1	
杉山 元	-17	福岡	2	
山崎 達之輔	-17	福岡	1	
末次 信正	-17	山口	4	

氏名	＝	出身県	書簡通数	名刺
板垣 征四郎	-22	岩手		1
安井 英二	-27	東京	1	
大谷 尊由	-23	京都	5	
瀧 正雄	-21	愛知	2	
石渡 莊太郎	-28	東京	3	
広瀬 久忠	-26	山梨	2	
野村 吉三郎	-14	和歌山	2	
青木 一男	-26	長野	2	
畑 俊六	-16	福島	4	1
宮城 長五郎	-15	埼玉	1	
松浦 鎮次郎	- 9	愛媛	7	
秋田 清	-18	徳島	1	
遠藤 柳作	-23	埼玉	2	
唐沢 俊樹	-28	長野	1	2
太田 耕造	-26	福島	2	
藤原 銀次郎	- 6	長野	7	
松野 鶴平	-20	熊本	2	
吉田 茂	-15	東京	2	2
松岡 洋右	-17	山口	9	1
橋田 邦彦	-19	鳥取	2	
石黒 忠篤	-21	福島	6	1
井野 碩哉	-28	東京	1	
小倉 正恒	-12	石川	5	
鈴木 貞一	-25	千葉	8	1
村瀬 直養	-27	栃木	1	
小泉 親彦	-21	福岡	1	
小谷 正之	-26	熊本	2	
湯沢 三千男	-25	栃兵	2	
安藤 紀三郎	-16	大長	2	
岡部 長景	-21	長野	10	
五島 慶太	-19	山形	1	
緒方 竹虎	-25	山形	14	1
小林 跻造	-14	広島	1	
田中 武雄	-25	兵庫	1	
東郷 茂徳	-19	鹿児	1	
安倍 源基	-31	山口	3	
阿南 惟幾	-24	東京	1	
小日 直登	-23	福岡	2	
下村 宏	-12	和歌山	23	1

計160名